九州地区大学体育連合／九州体育・スポーツ学会 合同企画
（九州体育・スポーツ学会第71回大会）

研究ベースの九州地区大学体育連合70年

―大学体育の教育成果の再考―

【演者】　九州大学名誉教授・元熊本学園大学　**橋　本　公　雄**
【企画・司会】　九州地区大学体育連合 企画委員長　**藤　井　雅　人**
九州体育・スポーツ学会 大会企画委員長　**田　原　亮　二**

趣旨

最新の九州地区大学体育連合（以下九体連）機関誌『体育・スポーツ教育研究』（第22巻第１号：令和３年12月発刊）において，本企画の講師である橋本氏は「研究ベースの九州地区大学体育連合70年を振り返る」と題した「提言」論文を寄稿されている。その中で橋本氏は，九体連の70年の歩みを，九州体育・スポーツ学会，九州地区大学体育協議会，日本体育・スポーツ・健康学会，全国大学体育連合といった他組織との関係性に言及しながら振り返り，特に研究をベースとした九体連による大学体育・スポーツの諸問題との関わりについて詳述されている。そして，九体連がそうした研究ベースのあり方を維持することで，今後の大学体育・スポーツの発展に寄与していくよう提言されている。

上記論文中でも指摘されているように，現在九体連はその会員校の減少に苦慮しており，早急にその対応策が求められるが，なかなか効果的な施策が打てていないのが現状である。また，九体連はこれまで大学体育・スポーツの意義や具体的な展開方法について科学的なエビデンスに基づき知見を蓄積してきたといえるが，九体連が現在もそうした役割を担っているとは言い難いようにも思える。九体連が抱えるこうした問題の解決の糸口を探るために，本企画では，橋本氏に70年の歴史を踏まえた九体連の今後のあり方，また九体連と九州体育・スポーツ学会との連携・統合の可能性，さらには九体連が見据えるべき大学体育・スポーツの発展の方向性についてご提言いただく。

（「九州体育・スポーツ学会第71回大会プログラム」より）

報告

本合同企画は，2022年８月27日（土）11時10分～12時10分に，九州保健福祉大学Ｆ講義棟で，３年ぶりとなる対面形式で開催された。本年度もコロナ禍にあって，昨年度と同様に実技研修ではなく，講演による座学での研修となり，30名弱の参加があった。

まず，企画・司会の立場から藤井による簡単な趣旨説明，および田原から演者である橋本氏の紹介がなされた。次いで，橋本氏が「研究ベースの九州地区大学体育連合70年－大学体育の教育成果の再考－」について約45分間の講演を行った。橋本氏はその講演の冒頭で，①一般体育の担当教員の全員が教育成果に関する授業研究を行うべきであること，②大学体育連合はそのミッションを再確認し大学体育授業の必修化に向けて努力すること，③大学体育連合はスポーツの活性化を通して大学に貢献する活動を展開すること，の３点を以下の講演の結論とし，各論点に沿って具体的内容に言及されることとなった。特に，橋本氏を中心にこれまで進められてきた，九体連に関連する授業研究プロジェクトについて歴史を追って紹介されるとともに，現在研究グループで大きな成果を出している「挑戦的課題達成型体育授業」の実践とその教育効果について詳述された。そして，「挑戦的課題達成型体育授業」では，「魅力」「価値」「冒険・挑戦」から成る「三元論的相互干渉モデル」に基づき，ポジティブな徳性の向上効果による学生の自己成長が期待されるため，一般教育の一環としてのより強固な位置づけを獲得できると主張された。また，橋本氏は，九体連会員校の減少という問題とも関連づけて，九州体育・スポーツ学会に第６専門分科会として，大学体育授業の必修化の堅持と拡大を目的とした「大学体育授業研究専門分科会」の設置を提言されることとなった。

講演の後には，大学体育授業における健康の位置づけの再考，九体連会員校の減少を食い止めるための他組織との連携・協力の可能性などについて質疑応答や意見交換が行われた。そして，九体連の立場からも，上記した九州体育・スポーツ学会の第６専門分科会「大学体育授業研究専門分科会」の設置について検討を進めてみてはどうかということになった。

本合同企画での橋本氏の講演を通して，大学体育授業研究をベースとする九体連のこれまでの歩みを確認することができたわけだが，今後も九体連は，九州体育・スポーツ学会と密に連携・協力して，そうした研究の成果・知見に基づきながら，大学体育授業の必修化の堅持と拡大のための活動を展開していく必要があるように思われる。橋本氏には引き続き，上記の「挑戦的課題達成型体育授業」に関わる研究成果を九体連より発信し続けていただければ幸いである。

（文責：藤井雅人）

第10回大学体育スポーツ研究フォーラム報告

第10回大学体育スポーツ研究フォーラムに参加して

福岡大学　大　坪　俊　矢

令和４年３月３日（木）に「第10回大学体育スポーツ研究フォーラム」がZOOMによるオンラインで開催されました。私は，今回が初めての「大学体育スポーツ研究フォーラム」への参加であり，北陸支部主催によるシンポジウムや一般発表への期待感と私自身の発表への緊張感を持ちながら参加させていただきました。

今回のフォーラムでは，最初に「大学体育で使える縄跳び運動」というテーマでシンポジウムが行われ，その後に15演題（研究報告：12演題，事例報告：３演題）の発表が行われました。

シンポジウムでは，「縄跳び運動の魅力と効果について（宮口和義先生：石川県立大学）」「縄跳び運動の実践指導（田口師永先生：縄跳びパフォーマー）」「大学における連鎖交互跳びの授業実践（佐伯聡史先生：富山大学）」の３セッションで構成されており，教育現場での実践例や協同的な学びを実現できる縄跳び教材について紹介されました。シンポジストの講演を拝聴し，縄跳び教材が技能習得・体力向上だけを目的とした教材ではなく，協同的・対話的な学びを実現できる教材でもあるということを参加者は学ぶことができたと感じています。今回のシンポジウムでの学びを大学体育へ導入するだけではなく，教員養成段階の学生へ共有し，縄跳び運動の魅力や発展性が初等・中等教育の現場に普及していくことを期待したいと思います。

一般発表では，教育現場を苦悩させているCOVID-19に関する報告があり，自身が所属している教育現場と照らし合わせ，参考になった参加者も多かったのではないでしょうか。その他にも，大学体育におけるLGBTQ+への配慮の必要性に関する報告もありました。このような発表は，大学体育が普及・発展していく上で大変貴重な報告だったと感じています。大学体育に求められることは時代によって変化していきます。社会の変化に応じた大学体育を学生たちに提供していくためにも，現代における大学体育に対する問題提起の報告が今後も活発に行われてほしいと思います。

今回の優秀発表賞には，「スポーツ実技授業前後の社会人基礎力の変化：コロナ禍における受講生の運動習慣に着目して」という演題で発表された前田奎先生（京都先端科学大学）が選ばれました。初等・中等教育では，授業として定期的に運動が行われていますが，高等教育機関である大学では1991年の大学設置基準の緩和により，保健体育科目が必修の卒業要件から外され，大学で体育を行わない事例が多く現れました。そのため，高等学校を卒業してからの生活習慣に運動を取り入れていない学生が多いのではないかと思います。また，「健康のためには運動が大切」ということがわかっていても運動習慣がないという学生もいると思います。今回の発表にあったように，運動習慣が自身の健康だけではなく，社会人基礎力にも肯定的な影響を与えている可能性があるという知見は，上述したような学生が生活習慣に運動を取り入れる新たな動機の一つになりえるため，非常に貴重なご報告でした。

シンポジウム・研究報告をとおして，今後の授業に活かしていきたいことなど，多くのことを学ばせていただきました。今後も大学体育フォーラムには積極的に参加し，様々な情報を得ていきたいと思います。そして，私自身も大学体育の発展に貢献できるよう日々精進していきます。

最後に，COVID-19の影響により教育現場が混乱しているなか，様々な情報を共有することができる機会を提供してくださいました大学体育スポーツ研究フォーラムの開催と運営にかかわられた全ての方々に感謝申し上げます。